

〔書評〕

鈴木 博著

# 『室町時代語論考』

此のたび、鈴木博氏の『室町時代語論考』の書評を書く機会を得たことを光榮に思う。筆者は、鈴木氏から抄物の研究を通して多大の学恩を蒙り、今日に至っている。筆者には何が勝ちすぎているが、ご恩返しのためで書かせていただいた。

本書は、著者が長年に亘って、一貫して続けてこられた室町時代の言語研究に関してまとめられた諸論考のうち、昭和三十四年三月に発表された論文から昭和五十九年六月に発表された論文までの二十三編（巻末「本書所収論稿の原題と初出年時一覽」参照）をもとに、「あるいは補説を添え、あるいは多少の加除を施し」（「あとがき」）、一書にまとめられたものである。

本書が出版された前後には、出雲朝子氏の『玉璽抄（中心とした）室町時代語の研究』（昭57・10）、寿岳章子氏の『室町時代語の表現』（昭58・10）、森田武氏の『室町時代語論攷』（昭60・5）、柳田征司氏の『室町時代の国語』（昭60・9）等々、室町時代の言語に関する研究成果が次々と刊行されており、本書の出版はまことに時宜を得たものといえよう。

本書の構成を目次によって示すと、次のごとくである。

## 第一部 語誌

## 坂詰力治

一 「カガシ」の語源

二 狂言用語「ガゴウジ」の語源は「元興寺」にあらず

三 京言葉「ハンナリト」の誕生

四 才段長音開合からの考察

(一) アイソウ（愛崇・愛想） (二) ヒナタボッコウ (三) ボウボウト

五 抄物語彙考

(一) ベンタウ（便当・弁当） (二) 副詞「ナック」 (三) ミチレナイ

(四) ヤマスル (五) ウラ思イ・猶豫 (六) 動詞「コク」

第二部 抄物各種 資料性と言語

六 抄物概説 付 「長者」の清濁

七 「蒙求抄」の先抄本

(一) セイジ（世事） (二) セド京上 (三) フルシイ (四) ギャウドウの

下入

八 「大成和抄」

(一) 諸本 (二) 四字ヲ名詮悪シト云 (三) ウッタウシイ (四) サウカ

ウ（草合・草冠） (五) ネマル

九 「四河入海」の二写本の比較

一〇 「三体詩抄」諸本概観

二 叡山文庫蔵の『錦繡段抄』

付説1 『周易抄』の「ダ」

付説2 「ヒサゴ」と「ヒシヤク」

三 『長恨歌抄』に見る官賢の講解態度

(一)「瓦」の解 (二)梨から桃李へ

三三 『玉塵』の二写本の関係瞥見 補説 「七書」の読み

三四 医学の抄物二、三 —— 栢・道器・玄朔 ——

第三部 音韻・文法

三五 オ段音に後続する「ほ」の長音化過程——抄物・キリシタン資料における——

三六 中世国語におけるバ行音とマ行音との交替

三七 ロドリゲス『日本大文典』の関東方言の条の解し方

第四部 国語史的立場から中世のなぞなぞを解く

三八 中世の謎についての国語学的考察

元 『日本書紀抄』のハ行音記述——永正のなぞ「母には三たび」の解きへの支証——

三〇 中世の謎々を解く

(一)『月庵醉醒記』の「なにそ」 (二)『あたうかたり』 (三)香川大学蔵『謎立』から (四)宸筆本『なぞだて』から 参考文献

献

三 永正のなぞ「こつてう」私解

付 「一里ほほうさいやれ」続貂

そして、他に土井忠生博士の「序」と「あとがき」「本書所収論稿の原題と初出年時一覽」「索引」(i語句索引 ii事項索引)を付す。

以下、各論考の内容の概要を紹介しつつ、併せて筆者の考えを述べる。

第一部は、語誌に関する論考を収める。

一——「案山子」は、越谷吾山の「物類称呼」に、関東では清音「カカシ」、関西から北越辺では濁音「カガシ」といって、方言上の使い分けがあったという。したがって、「案山子」の語源を考える場合には、清濁形のどちらを本来形とするかが問題となる。まず、清音「カカシ」を本来形とする立場に立ってなされた三つの語源説(亀井説・田井説・志津田説)を検討し、三者の唱える「カカシ」の発生以前の語形が、いずれも文献による実証が得られないという理由で、賛同しがたいとする。そのため、「カガシ」(及びその同義語の語史を明らかにしていく過程で語源を討究することが肝要)であると考え、「カガシ」を意味する古い言葉として、ソホド・ソボツ・オドロカシ・オドシの語史を文献の上から跡づけるとともに、「カガシ」の文証を行い、その上で、江戸時代以来説かれている濁音形「カガシ」の語源説を検討している。その結果、濁音形「カガシ」を本来形とする立場に立つて文献的、語史的に語源を考察するとき、『学研国語大辞典』の「カガシ」の項に示された「なにがし(某)」と同類の「か彼がし」から転じた語であるとする見方が妥当であろうと推論する。

一——「狂言用語「ガゴウジ」の語源については、江戸時代に大和の元興寺(傍点筆者)の鬼の伝説に結びつけて、「グワンゴウジ」の音訛とする説がある。しかし、この「元興寺」語源説について、柳田国男は妖怪を意味する方言から考察し、「咬もう(そ)」の音訛によるものとした。著者は柳田説を詳細に検討し、国語音韻史の立場から、「元興寺」語源説を否定し、柳田説にも従え得ないことを考証

している。すなわち、室町期の抄物に、狂言の「ガゴウジ」と同じ意味の語が「ガガウゼ」という語形で使われていることから、「ガゴウジ」は中世の抄物へさかのぼる「ガガウゼ」であったとしている。それ故、「ガゴウジ」を「通説のようにグワンゴウジ（元興寺）からの音訛である」とすると、グワン↓ガ、ゴウ↓ガウ、ジ↓ゼという三通りの変化が室町期におこっていたことになり、ゴウ↓ガウのオ段長音の開合の混同についても、当時はまだ一般的に区別して、「ガガウゼ」の語源がグワンゴウジであると認めることはなはだ困難であり、また、「咬もう」を語源だとする柳田説に対して、抄物のガガウゼとは容易に結びつかず、文献の上で語史を辿ろうとする立場からは受け入れることができない」と結論づけた。なお、抄物の「ガガウゼ」の語源については、明確な結論が得られないとして保留している。

語源研究は、いろいろな推論をはたらかせ、しつかりとした論証のもとでなされることが重要である。そして、それも実際に支える文証がなければ、説得性を欠くものとなってしまふであろう。その意味において、一一の論考は勿論のこと、本書全体を貫いている著者の徹底した実証主義は、読むものをして十分に納得させる。しかし、傍証に依存するあまり、時に基本的な論理によって支えられているはずと思われるものにも、微証を求めずには止まないという虞も生じかねないのである。また、一一二で「ガゴウジ」について考証されたような語源の問題は、そのことば自体が人々の日常生活や慣習などに支えられて作られやすい要素をもっているだけに、例えば、音韻史の立場から明らかにされようとするほど、むしろ、語源研究というものがすべて学問的のみ割り切れるもの

なのか否かという疑問が起ってくるのである。

一一三 京都を中心として使われる「ハンナリト」の従来の語源説に「晴れなり」がある。この語源説は、「ハレナリ↓ハンナリ」という行音の撥音化として首肯できるが、「晴れなり」の文証が得られないこと、またアクセントが相違することの二点から否定されると説く。そこで、前田勇氏編『上方語辞典』の「ハナ（花・華）」に、状態を表わす接尾語を付け、強める気持を表わすために撥音化した語を「ハンナリト」の語源説として最も適当と考え（なお、著者は「ただし強めるための撥音化というよりも、『ナ』へのわたり音が独立して撥音となったと見たい」と注記している）、語構成的立場から、「**A**と**B**り」との形をもつ副詞を抄物資料から広く捜し求め、検討を加えている。その結果、「ハンナリト」は中世口頭語の世界に、上中古以来の「はなやかに」「はなばなと」を一層心情的に表現するものとして生まれたものではないか」と推論をくだしている。

一一四 国語史上、中世においてはオ段長音が一般化し、オ段長音を伴う語の表記には同一（と思われる）語にも関わらず、開音表記したもの、合音表記したもの、さらには短音表記したものなど、さまざまなものが見られる。そのため、その語の本来の語形・意味がどのようなものであったかを解する上で問題が生ずることになる。

本論考では、オ段長音の開合について疑問の存する（一）アイソウ（愛崇・愛想）、（二）ヒタタボッコウ、（三）ポウボウトの三語について、表記面、語構成などの観点から考えられるいろいろな可能性を、特に中近世の口語資料や古辞書などの用例の実態に照らして、綿密に追究し結論を導き出している。すなわち、「アイソウ」については、その用例数の上から合音を本来形と考え、和製漢語の可能性も強いとし

て、「いろは字」に見える「愛崇」が当てはまると説く。「ヒナタボツコウ」は、本来、古形「ひなたほこり」から音変化した合音形であったが、中世には「日南多北向」という漢字と結びつけて表記されることが多いことから、それを語源と捉えるようになり、「開音の方を正しいとする考えが芽生えてきたのではないか」とする。「ポウボウト」は、草が非常によく茂っている様を形容したり、音を形容する語の場合は、開音形「パウパウ」であり、髪の毛などの乱れを形容する語の場合は、合音形「ポウポウ」であるとするとする。そして、「髪などの乱れている様を表わす合音「ポウポウト」は、草のよく茂っている様を表わす開音の「パウパウ」と、漢語の「ポウソウ」(胡鬚)とが混交したものではなかるうか」と推論する。

ここに取りあげられた三語に見られるような問題は、中世資料を扱うとき多く直面するものであるだけに、興味ある論考といえる。

才段長音の開合に関わる語の判断には、この論考で示されたような文献にもとづく綿密な考証と、しっかりとした手続きが重要である。

一―五 抄物に、いわゆる文学作品などには見出せない特異な語詞が存するという指摘は、早くからなされている。ここで取りあげられた(一)ペンタウ(便当・弁当)、(二)副詞「ナツク」、(三)ミチレナイ、(四)ヤマスル、(五)ウラ思イ・猶豫、(六)副詞「コク」などは、その代表的なものであるが、これらがいずれも抄物の中では、特異な意味・語形をとって使われているものであることを、中世後期の資料、特に古辞書などによって考察している。抄物におけるこうした特異語の研究成果は、今日ではようやく辞書などにも多く取りあげられ、また、中世資料のヨミも的確に行われるようになり、著者の果した中世語彙研究は高く評価されなければならない。

第二部は、二―六で抄物の資料的価値、内容、文体、種類、盛行時期、作成者などを要領よく簡潔に概説し、二―七以降二―一四において、具体的な抄物資料を取りあげ、諸本との関係、講者の問題、国語史料としての価値などについて取り扱っている。

抄物は、一般に原典が同じでも、講義者が違えば、読解内容、講述用語や文体なども、程度の差こそあれ、異なるものとなる。また、筆録者の側からみても、筆録者が異なれば、同一講義であっても、違いが見られる。二―七はそうした抄物の特性から、先抄本と後抄本とに二大別されるという清原宣賢講の「蒙求抄」を取りあげ、先抄本に見られる特徴的な語詞、(一)セイジ(世事)、(二)セド京上、(三)フルシイ、(四)ギャウドウの下入の四つについて、後抄本と比較し、国語学的観点から考察している。このうち、(三)の「フルシイ」はク活用のシク活用形化の例として指摘されたものであるが、「フルシイ」について、著者は次の二つの原因があつたのではないかと推量する。すなわち、

①対義語の「新シ(イ)」との同化現象として発生して来たのではないか。

②ク活用形容詞の語幹反覆によって生じる形容詞(「いとさだ過ぎふるぶるしき人の」〔枕冊子〕七十九段日本古典全書一四二頁)はシク活用なので、それによりシク活用「フルシ(イ)」が使われただのではないか。

のごとくである。しかし、中世には、古くク活用であつたものが、シク活用化しているものが多く見られるので、その一語一語をすべて右のようにその原因を探っていくことは必ずしも容易ではないで

あろう。したがって、形容詞のク活用シク活用形化については、引用されたような「情意性の語に転化させた」(『日本文法大辞典』二八六頁下段。山口佳紀氏執筆)とする考え方もあてはまる例(たとえば、「サテ此寒シイ衾ヲハ誰と与ニカセント御歌キアルソ」へ内閣文庫蔵「長恨歌琵琶行和解」鶯鷺瓦冷霜華重翡翠衾寒誰与共の条)も見られることから、むしろ、先の「フルシイ」の原因として説かれた考え方も合わせて、ク活→シク活への理由を考える必要があるということであろう。

二一八も、二一七と同様の主旨から、曲直瀬玄朔講の『大成和抄』について書写本の先後関係を考究し、その上で、「名詮悪シ」「ウツタウシイ」「サウカウ(草合・草冠)」「ネマル」の四つの語詞について、その意味を語源から詳細に追求している。特に「ウツタウシイ」の語源説については、確かに「執念↓しふねし」と同様、「鬱陶↓うつたうし」の経路を考える方が妥当性があるように筆者も思うが、中世におけるク活用のシク活用形化の例が多いことを考慮に入れても、なお引用された柳田征司氏の「反復形でない字音語をシク活用にした例がほかにあるのかどうか不明」(『講座日本語の語彙』4、二三七頁)という懸念が文証によって解消されなければ、不安は残るといえよう。また、そうした懸念が存する場合、必ず文証を求めて取り除くという一貫した態度をとっているのが著者の論究態度のほずであらう。

二一九 「四河入海」の現存二写本(東福寺本と両足院本)については、同一系統本と見做すことができるが、「例えば、才段長音の開合などの点で修訂しようとする意図があるようにうかがわれる」ということから、二本間にみられる相違を、才段長音の開合、四つ

がな、語法、単語といった国語学的立場から詳述している。そして、結果的には、東福寺本は総合的に見て原本か、原本に極めて近いものであり、両足院本はその依拠本が、開合その他の国語学的視点から別箇のものであったろうと推定している。本論者は、二本間の写本の原初形を、国語学的立場から考察する上で極めて有効な方法論を示されたばかりでなく、抄物の中に存する一般文学語とは違った特殊なことばを、とかく誤写として処理してしまう虞のあることを反省させるものとなっている。

抄物の資料の存在が明らかになり、それらを閲覧する機会を比較的容易にもてるようになって今日、ある抄物を選んでそれを研究資料とするには、その抄物の諸本をできるだけ調査通覧し、その上で資料の位置づけを行い、最善本を決定することが望まれる。二一〇では、そのような立場から、中世の五山僧たちが広く読んだという『三体詩』の抄物、すなわち『三体詩抄』の諸本(元和以前)約二十部を通覧し、諸本の各性格について、講述者の数、内容、先行抄との関係、国語史料としての諸本の価値等々に視点をあてて所見をのべている。『三体詩抄』の諸本は「諸説の入組んでいることが多く、これらを類別することは容易でない」といわれるだけに、諸本二十部を通覧しての調査結果を細かく九つに整理されたことは、『三体詩抄』を取り扱う後学にとって、その恩恵に深く浴することとなった。

二一一 叡山文庫天海蔵の写本『錦繡段抄』の奥書に、永祿七年(二五六四)頃に本書が東国で書かれた旨の記述があることに着目し、東国語としての言語的特徴を示すといわれる(1)断定の「ダ」、(2)八行四段動詞の促音便、(3)下一段活用、(4)開合と四つがななどが、実際にどのような形で使われているかを調査検討している。その結

果、『錦繡段抄』には右の(1)〜(4)の東国語的なものの混在を認めることはできるが、それを「本書が東国で書かれた故をもって東国語としてのそれであると速断できるかとなると、それはむずかしい」としている。なぜなら、先の(1)〜(4)の言語的特徴は関西系の抄物などにもそれぞれ認められるところであり、東国語であると思ふためには、『錦繷段抄』の諸本の関係が明らかにされ、祖本との比較が可能になることが先決ということであるからである。傾聴すべき重要な指摘である。

二一一二 「長恨歌抄」の現存写本、板本、整板本を精査し、それぞれの関係を明らかにした上で、清原宣賢講の「長恨歌抄」において認められる、原詩から離れた自由な講解態度二点——「瓦」の解」と「梨から桃李への捉え方」——を取りあげ、なぜ自由な講解態度がとられたのか、理由を明らかにしようとしている。抄物は漢籍を原典とするものが多い。したがって、一般的には原典に忠実に講解されることが考えられる。しかし、時には宣賢講の右の二点のように、原典から離れて自由に意訳されることのあり得ることを示唆したものとしてみたいといえる。

二一一三 「玉塵」の二写本、すなわち国会本と叡山文庫本とについて、その依拠関係を論ずる。出雲朝子氏の述べられた「叡山本は国会本からの直接の転写本」とする考えに対して、傍訓の有無、講述内容と密接に関わる敬卑の助詞「ガ」の有無、さらには誤脱文の有無にも注目して、叡山本は国会本からの直接転写本でも、また間接転写本でもなく、国会本以外の経路を想定する必要があることを示唆している。

二一一四 わが国において早く出版された医書の一つとされる

『俗解八十一難経』を対象として、一栢により講解された抄物が、享祿二年(一五二九)の一栢自筆本『俗解難経抄』である。この『俗解難経抄』に類縁の抄物に、『難経雲庵抄』(一栢『難経蓬庵抄』(道器)、『八十一難経抄』(玄朔)が存することを述べ、一栢の諸抄本と諸抄との依拠関係について詳説している。そして、一栢も道器も関東に居住した経験を有する人物であるところから、国語学的立場から、断定「ダ」が頻用されている『難経雲庵抄』について、その「ダ」の使用が一体誰なのかを問題にし、さらに、断定「ダ」以外に、四つがな・開合・活用・かたち読み等々、国語学的観点から注意すべき点のあることを指摘し考証している。二一一にも一面通ずる論考として注意される。

第三部は、音韻事象に関わる論考二点と、外国人の観察した方言文法に関わる論考一点を取りあげている。

三一一五 抄物・キリシタン資料におけるカナ・ローマ字表記から、オ段音に後続する「ほ」「を」(時に「う」「ふ」)の長音化して行く過程を明らかにしようとする。当該語の抄物でのカナ表記やキリシタン資料のローマ字表記の様態を整理考察することによって、そこには語の相違によって長音化の遅速する様相が看取されることを明確にした。そして、この遅速の現われる理由について、例えば「焰」については、当代人の「焰」に対する語源意識(「火の穂」)の根強さが非長音化をとらせ、また、「憤る」「通る」「氷る」などについては、「ほ」のなかに当たる部分が音便化した場合、促音便になるため、促音の前の長音化は起きにくかったのではないかとみている。なお、Fonono(焔)について、柳田征司氏は「語末に長音が立つと、語が

不安定に意識され、それで避けられることがあったのであろうか」(『室町時代の国語』六四頁)と推量しておられる。両氏の見解をもとにしつつ、なお今後検討されるべきであろう。

三一―一六 子音の交替現象の中で特に目につくものの一つとして、バ行音(以下Bと記す)とマ行音(以下Mと記す)との交替がある。ここでは、中世国語において顕著な傾向を示すB↓M化について、『天草版平家物語』とその原拠本の一つと考えられている『百二十句本平家物語』とを基に、バ行音・マ行音を有する関係語彙について両者を対比し、百二十句本のBが天草版Mへ変化していることを明らかにしている。そして、天草版に見られるM↓B化の例外の一語「鞭」については、音韻上の変化ではなく、『片言』に、

馬の鞭を。ぶちはわろしと云り。鷹、猿の時には。ぶちといふとぞ(巻四)

とあることを傍証として、「天草版で、駒を早める場合にだけ『むち』と使われているのと照応する」として、用法上の差による現われと解している。

中世国語に認められるB↓Mの傾向を、音韻上から両唇破裂音↓両唇通鼻音の変遷として捉え、ハ行音変遷の場合と同様「両唇音による調音労力の節減化である」と見做し得る」としたのは正鶴を射たものと言える。しかし、有坂秀世博士「国語音韻史の研究」(増補新版四二―一頁)を参照して、「平安初期における広汎なM↓B化の素因の究明に至っては、今後の考察に俟たねばならぬものがある」としておられるように、B↓Mの変遷は、必ずしもハ行音変遷のP↓F↓Wのような過程を辿ってはいないことを考えると、MとBとの交替については、例えば文体に関わる点をも考慮するなど、なお今後

の考察を俟たねばならないであろう。

三一―一七 ロドリゲスの著した『日本大文典』に見える関東方言に関しての数項のうち、橋本進吉博士と土井忠生博士とが訳出している項の原文の内容の解し方について、二人の訳文を比較検討して詳細な考察をしている。そして、考察にあたっては、想定されるあらゆる条件を設定し、その一々について当時の実際の言語事象に照して徹底的に分析を加え、慎重に結論を導き出している。「着眼点の鋭さを示す好個」(土井博士序文)の論考といえる。

第四部は、中世に行われた謎々について、国語学的立場からその謎解きの考察をした諸論考を収める。

四一―一八 新村出博士により解明された「母には二たびあひたれど父には一度もあはず くりびる」という謎を有する「後奈良院御撰何曾」が、永正十三年(一五二六)正月廿日の後柏原帝染筆にかかると「なぞだて」(著者注、宸筆本と略称)であることは、夙に石川廣氏によって明らかにされている。ここでは、その「なぞだて」に見られる謎の解き方について、宸筆本と類従本との本文の相違を考慮して、国語学的観点から巾広く考察する。特に先学者の解き方に対して異見を述べると共に、まだ先学者が説き及んでいない謎に対する見解を示したり、天理図書館本「謎の本」に見られる語学的特徴についても整理している。

四一―一九 永正に行われたなぞ「母には二たび」を、ハ行音史から解明する上で、時期的に恰好の資料となる『日本書紀抄』(天理図書館蔵、永正十三年く大永六・七年、清原宣賢書写)を取りあげ、そこに見られるハ行音に関する二つの記述(すなわち、「フワ、ハヒフへホ、

ミワ、マミムメモ、皆、唇ニアタル音也」ハノ音ハ唇ニアタル」から、当時のハ行音が唇音であったことを立証する。そして、「ハ行音史を構築する立場に立つて、永正の頃の資料を考えるならば、『母には二たび』のなぞよりも、『日本書紀抄』の方が適切であろうと思う」という指摘は、ハ行音が唇音であったことを証する、より強固な説得力をもっている。

四二〇 先学によって、すでに取りあげられている中世の謎々のうち、吉田幸一博士蔵『月庵醒記』（三巻）中の「なにそ、佐賀大学蔵『あたうかたり』、香川大学蔵『謎立』、天理図書館蔵『なぞだて』の四資料から、国語学的立場から見ても疑問と思われ、または、謎解きに関して別解の考えられる謎を取りあげ、慎重な配慮を加えつつ、詳細に検討し、見解を示している。なお、稿末に添えられた謎に関する参考文献は有用である。

四二二 永正の宸筆本『なぞだて』の中の、第九三番目の謎  
しゆくのけいせい 一こつてう

に対する本居内遠の解（後奈良院御撰何曾之解）に対して、従いがたい理由を述べ、「しゆくのけいせい↓宿の傾城↓いちこ（巫女、市子）と言ふ↓いちこてふ（イチコチョー）↓いちこつてう（イチコツチョー）↓一越調」という順序で解せられることを、一つ一つ検証しながら述べている。

謎は、まさしく、序で土井博士が述べておられるように、「人の意表を衝いて楽しむことば遊びであって、当時の人にも直にそれとわかるものではなかった」のである。したがって、その「真意を捕えるのには、その背景をなす当時の社会全般に精通する必要がある」、そして「融通のきく推理力と言語その他当代の社会全般にわたる知

識とが相待って、謎解きが可能となる」のである。それ故、広汎な知識・経験と深い洞察力を備えた著者にとって、謎の研究はその力量を十分に発揮し得るにふさわしいものとなっているのである。

以上、本書における二一の論考について、その概要を紹介しつつ、筆者の考えをいさか述べた。率直に言って、筆者は本書から多くの教えを受けるばかりで、適確な評言を下すことができずに終ってしまったことを残念に思っている。本書を通読して特に学び得たことは、著者の論考をまとめる上で終始一貫してとらえられている次の三つの姿勢である。

一 いかなる場合でも、基礎的・基本的な事柄を決して疎かにせず、周到綿密に吟味し、多くの文献資料を博搜して必ず文証を求め、考察を進める。

二 資料の扱いに対しては、徹底した客観的態度でのぞみ、主観の入る余地を与えない。

三 ある現象、あるいは問題に対して、考えられる限りの可能性を追究し、余すところなく検討を加えて、慎重に結論を導く。

本書が、室町時代語の総合的研究を目指したものとして、確固たる位置を占めるべきものであることは疑いのないところである。国語史研究を目指す者にとって、著者の対象に対して立向う右のような姿勢は、あらためて学びとる必要があるであろう。その意味においても、本書がより多くの人々に読まれることを期待する。

（昭和五十九年十一月三十日発行 清文堂出版刊 A5判 三九八頁 九八〇〇円）  
—— 東洋大学教授 ——

（昭和六十二年四月三十日 受理）